

Museum News

秋田県立博物館ニュース



白文円印「根本通明」当館寄託資料を撮影



収蔵資料紹介（先覚部門）

根本通明愛用の筆と印章

大仙市刈和野出身で漢学者の根本通明が愛用したとされる筆と印章です。印章は通明の書に押印されているのが確認できます。このたび親族の方から寄贈していただきました。

目次

表紙・目次	P.1
企画展「北前船と秋田 ー日本遺産認定記念ー」	P.2
展示紹介	
「山と生きる 太平山の信仰と人々の暮らし」	P.3
（報告）秋田の先覚記念室 企画コーナー展 齋藤宇一郎と齋藤憲三	P.4
（報告）「輝きの中の鉱物たち」ー大地の芸術作品ー	P.5
学芸ノート	
（考古部門）洲崎遺跡の井戸にみる丸木舟と人魚供養札	P.6
（工芸部門）あなたはなにもの？ 作者不詳「達磨図」について	P.7
2020年度 展示予定	P.8

企画展「北前船と秋田ー日本遺産認定記念ー」

令和元年10月5日(土)～11月17日(日)

平成29年4月、「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～」が日本遺産に認定され、その後の追加認定も含め県内では能代市・男鹿市・秋田市・由利本荘市・にかほ市、全国では計45市町が認定地となっています。

本展では江戸時代から昭和戦前期までの、秋田地域の北前船や海運に関わる資料約150点を展示しました。北前船はもとより和船そのものが現在ではなじみが薄くなっていることから、展示では基礎的な歴史情報の提供や、昔の港の風景、廻船間屋など港の商人、川舟の役割など、物資が運ばれ流通する過程を含めて紹介しました。また、秋田からは蝦夷地(北海道)で漁場を営んだ人や漁業出稼ぎに渡道した人が大勢おり、北前船が主力商品とした鯡魚肥に秋田の人々が生産面で関わっていたことを紹介しました。

会場では時間をかけてじっくり観覧の方がよくみられ、また船絵馬をお借りした神社では梱包している最中に「船絵馬を見たい」と訪ねて来た人に出会うなど、北前船への関心の高まりが感じられました。快く資料をご提供頂いた方々に感謝申し上げます。

展示構成：1 北前船とは 2 つながる地域 3 海の道 川の道 4 港の商人たち

5 船のある風景 6 秋田の廻船 7 北をめざす人々

(歴史部門 新堀 道生)



弁才船模型(斎藤宇一郎記念財団蔵)と船筆筒(館蔵)。小型の模型ながら帆を上下させ荷物の積込口を開くことができるなど精巧なつくりでした。



船絵馬(能代市・恵比須神社蔵)。能代市・男鹿市・由利本荘市・にかほ市の江戸～明治時代の船絵馬21点を紹介しました。



明治時代の引札。キッチュな図案が好評でした。



田沼慶吉文書。男鹿市北浦の大船主・田沼慶吉の船税納付や集荷に関する資料。うち8点は今回初めて紹介されました。

展示紹介 令和元年12月7日(土)～令和2年4月5日(日)

山と生きる

太平山の信仰と人々の暮らし

秋田県中央部に位置する太平山は、山や田畑に豊かな実りをもたらし、航海の安全をまもってくれる山として人々の信仰を集めてきました。古くから太平山は薬師如来が住まう山として知られていましたが、江戸時代の中頃から「三吉さん」という神様が登場し、広く信仰されるようになります。

本展示では、「山をうやまう」、「山とくらす」の2つの構成で、太平山の信仰と山にまつわる信仰と、山の麓に住む人々の生活について紹介しました。「山をうやまう」では、三吉大神に関する掛け軸や梵天などを、「山とくらす」では、麓の集落で行われていた炭焼きや川漁、オエダラ箕と呼ばれる箕作りの道具や材料など、約180点を展示しました。

展示構成

山をうやまう

修験の山太平山

三吉さんが神になるまで

広がる太平山信仰

山とくらす

太平山とともに

箕つくりのムラ

名所太平山



県指定有形民俗文化財
山谷番楽面(個人蔵)

山谷番楽は秋田市太平山谷に伝わる民俗芸能で、太平山信仰に関わる修験者がつたえたものといわれている。現在、同地に残された15面の番楽面の制作年代は、中世後期から江戸時代までと幅があるが、中には裏面に面打の銘が残るものも数点確認されている。

ナマハゲ面
(男鹿市協本大倉ナマハゲ実行委員会蔵)

男鹿市協本地区では、ナマハゲが太平山から来たと言われていたり、「オエダラのサンキチ」という名がついていたりなど太平山由来のナマハゲが伝承されている。



大下駄(太平山三吉神社蔵)



三吉大神神影(太平山三吉神社蔵)



オエダラ箕および箕製作道具(館蔵)

秋田市太平黒沢地区では箕作りが盛んにおこなわれており、黒沢地区で作られた箕は「オエダラ箕」と呼ばれた。現在、太平黒沢地区と仙北市雲然地区の箕作り製作技術は重要無形民俗文化財に指定されている。

付帯事業

- 短歌・俳句を詠む会「太平山を詠む」
令和元年12月21日(土) 10時～14時
- 展示解説 会期中毎月第2土曜日 13時～13時30分

(民俗部門 丸谷 仁美)

秋田の先覚記念室 企画コーナー展

齋藤宇一郎と齋藤憲三

展示構成

- 1 (宇一郎) 生い立ち
- 2 農村指導に取り組む／「小作保険法」を提唱
- 3 横荘線の実現に向けて／宇一郎の功績を讃えて
- 4 (憲三) 生い立ち／アンゴラ兎事業に失敗
- 5 東京電気化学工業株式会社を創設
- 6 科学技術振興のために／憲三の功績を讃えて
- 7 宇一郎・憲三と白瀬家



齋藤宇一郎 (1866 ~ 1926)



齋藤憲三 (1898 ~ 1970)



【講演会の様子】

齋藤宇一郎は明治から大正にかけて活躍したにかほ市出身の農政家です。また、その子息憲三はフェライトの工業化に取り組んだ実業家です。

宇一郎については、乾田馬耕の普及に貢献したことに対する表彰状など、農業指導に関する資料を中心に紹介しましたが、ほかに宇一郎が晩年に建設に力を尽くした横荘鉄道に関する資料も展示しました。また、憲三については、フェライト製品やカセットテープなど、同氏が創設したTDKに関する資料を中心に展示しましたが、ほかに東海林太郎からの書簡や憲三夫人宛の中曽根康弘の色紙なども紹介しました。最後に宇一郎が白瀬蘆に宛てた書簡や、憲三と白瀬の弟の孫娘京子との交流を示す資料も紹介し、合わせて約50点の資料を展示しました。

付帯事業としては、11月3日(日)に公益財団法人齋藤憲三・山崎貞一顕彰会評議員の山崎澄子氏をお招きして、講演会「齋藤憲三先生を想う」を開催し、約50名の参加者に齋藤憲三の人柄やエピソードなどをお話いただき、好評を博しました。



【展示の様子】



【宇一郎関係資料 (齋藤宇一郎記念会ほか蔵) (先覚部門 平田 有宏)】

「輝きの中の鉱物たち」―大地の芸術作品―

今年度の地質部門の出張展は、仙北市からの依頼で角館樺細工伝承館で行いました。展示期間は令和元年11月9日(土)から令和2年1月26日(日)まで、約3ヶ月間行い3,200人近くの方々に観覧いただきました。

展示室ではパネル18枚を用いて解説し、海外の鉱物を中心に50点余りを展示しました。11月21日(木)にはテレビ局の取材もあり、翌日のニュースで放映されました。放映後は地元角館の方々の観覧も増え、期間中は県内外から多くの観光客に足を運んでいただきました。このたびの展示に際して、多岐に亘りご協力をいただきました仙北市立角館樺細工伝承館の皆様に感謝申し上げます。

展示構成

- I 鉱物とは?どのようなものでしょうか
- II 鉱物のすがたについて
- III 鉱物「黄鉄鉱、黄銅鉱、ダイヤモンド、石墨、ハークマーダイヤモンド、水晶、紫水晶、蛍石と水晶、方解石、天青石、魚眼石と東沸石、オーケン石、コベリン、石膏と重晶石、瑪瑙」
- IV 似ている鉱物



【角館樺細工伝承館のポスター】

◆展示風景◆



(地質部門 池端 広樹)

洲崎遺跡の井戸にみる丸木舟と人魚供養札

蛇口をひねると飲料水が出る現代ですが、水道が普及する以前、当時の人々は井戸を掘って地下水を利用してきました。秋田県内の遺跡では数多くの井戸跡が検出されています。井戸跡からは時として、思いもかけないような特異な状況や遺物を見せられることがあります。

当館の人文展示室では、平成9、10年に井川町で発掘された洲崎遺跡の出土品を展示しています。洲崎遺跡は13～16世紀と推定される集落遺跡で、300基を超える井戸跡、整然と区画された道路・建物跡、周囲にめぐらされた堀跡、そして大量の木製品などが発掘されています。洲崎遺跡の井戸に転用された丸木舟と発見された人魚供養札は、特異な井戸の状況を見せた好例といえます。

丸木舟は古くから用いられ、漁業と切り離せないものです。100年ともいわれる強い耐久性をもつ丸木舟は、八郎潟沿岸地域、男鹿地域をはじめ各地で長い間使用されていました。男鹿の丸木舟には樹齢300年以上の杉材を利用したものが多く、主な材は信仰の山である男鹿の真山・本山北側の杉です。この「おやまの木」を利用した丸木舟は、大漁をもたらすといわれていました。洲崎遺跡の丸木舟は単材を削り抜いたもので、舟底は平らになっています。この丸木舟を手斧で2つに切断して縦方向内向きに合わせ、井戸の外枠に転用しています。この木組井戸が作られた時期は、部材の年輪年代測定の結果、13世紀後半となります。



丸木舟を転用した井戸跡

人魚供養札は、丸木舟を利用した井戸跡から出土した墨書・篋書の認められる木製品です。絵は上に僧侶、下は人魚、人魚の前には供物を載せたと思われる台と椀が描かれています。人魚は2手2足をもち人面・魚身で顔と足を除く部分には鱗があり、僧侶は袈裟に高下駄姿で長めの数珠を手

にしています。人魚の両側には文字があり、釈文は「アラツタナヤ豆(テ)ウチ 豆ウチ(繰り返し符号)ニトテ候そわ可」、あるいは「アラツタナヤミウチ 人ニトテ候そわ可」です。前者は「あら かわいそう(だけれども)殺してしまえ そわ可」、後者は「とてもかわいそう 同じ人間なのに縛られてしまって そわ可」などと解釈されています。



「人魚供養札」墨書・線刻部分図

洲崎遺跡の人魚供養札は、中世期に人魚の出現が不吉なことのおこる兆しと捉え、僧侶が人魚に除災の供養をしている様子を描いているのではないかと推測できます。人面をもつ魚体は、中世期には絵巻や文献に記載が認められるもので、実際にはアザラシやアシカといった鰭脚類、あるいはリュウグウノツカイのような魚類を誤認した可能性が高いとみられます。

(考古部門 山田 徳道)

写真と図は、秋田県埋蔵文化財センター提供

あなたはなにもの？ 作者不詳「達磨図」について

掛け軸の裏に「東山布袋ノ圖」とメモ書きがあるにも関わらず、作者不詳「達磨図」と博物館に登録されたのはなぜでしょう。「太った僧」を「達磨」と判断したのか、メモを見落としたのかは今となってはわかりません。ただこの点を冷静に考えていくと作品の重要性が見えてきます。

作品の画題は「布袋図」に間違いありません。それは「臨牧溪(マ)図」と落款にも記されている通り、九州国立博物館所蔵の伝牧谿筆「布袋図」(重要文化財)の写しと考えられるからです。

牧谿は13世紀後半に活躍した宋代の画僧です。舶来した多くの作品は大人気で雪村や長谷川等伯らも魅了し日本の水墨画に大きな影響を与えました。しかしながら本国では忘れ去られ、名作の大半が日本にしか残されていない希有な画家です。九州国立博物館が所蔵する「布袋図」は徳川将軍家が所蔵し、後に米沢藩上杉家が拝領した記録がありました。名品であるが故、数多くの模写図が描かれた可能性が考えられています。

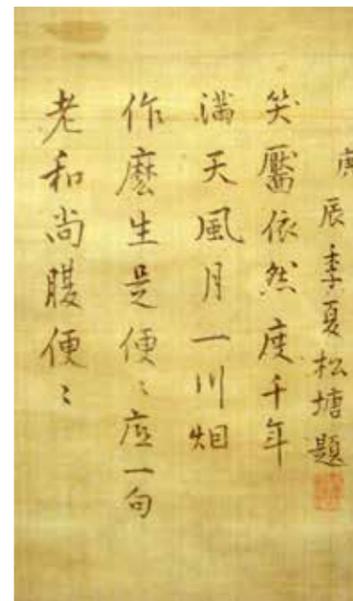
実際、秋田藩内でも明和年間以降の模写が散見されます。近年、秋田藩勘定奉行益戸滄洲、秋田蘭画の小田野直武、秋田藩御用絵師津村洞養のものが確認されました。徳川将軍家が下賜したのは正徳6年、つまり明和年間にはすでに上杉家が所有していましたので、佐竹家との間に絵に関する交流があったのかも知れません。明和安永の頃と言えば、名君と謳われる上杉鷹山と蘭癖大名の誹りを受ける佐竹義敦の時代です。関東以来の名家の誉れを受け継ぐ両家の交流は確かに興味深いものがあります。

秋田県立博物館の所蔵品には模写した人物の墨書「臨牧溪(マ)図東山宗瓊製」朱文方印「義満」があるものの、該当者は皆目見当が付きません。掛け軸の裏面に「東山」という人物について書いていて、描いたのは片野磐村(別号東山)としていますが、しかし、秋田藩家老正田松塘が画賛を書いた文政3年に磐村はまだ生まれていません。加えて印章に刻まれた「義満」は足利第3代将軍を想起させ、あまりに恐れ多い名前であり、この落款の正当性をにわかに信じられません。

果たして画賛を書いた御家老は絵師の落款を見たのでしょうか。後落款、そんな疑問も浮かびました。藩政改革で活躍した正田松塘は学芸にも秀で、この模写図がどういうものか、牧谿がいかなる画人であったか知らないはずがありません。仮に落款がなかったとしても、名画を模写する意義、鑑賞する嗜みに通じた人物だったに相違ありません。ですから添えた詩文を拙作と謙遜し、布袋の福々しい腹の形容を「便々」と重ねて表すことができたのです。

名作傑作と言わずとも、この「布袋図」は藩政期の秋田の文化、関わる人物の人となりが見え隠れする貴重な資料だと思います。手に取った人の心を宿し、後の世の人々を楽しませ、美術とはまた違った価値が付加されたのです。収蔵庫の奥に眠るこうした資料に光を当てるのは学芸員にとって重要な務めであると、今回の調査によってあらためて実感しています。

(工芸部門 山本 丈志)



画賛



布袋図



落款

2020年度 展示予定

企画展示室

企画展

重要文化財 「菅江真澄遊覧記」の公開

重要文化財「菅江真澄遊覧記」の全冊、
のべ356図を展示します。

4月25日(土)～6月21日(日)

企画展

蓑虫山人 —秋田を歩いた漂泊画人—

没後120年に寄せて、「蓑虫山人画記行」を中心に、
県内に残された絵画作品や蓑虫山人が描いた考古
資料などを展示し、足跡をたどります。

7月11日(土)～8月23日(日)

特別展

美の極致

—縄文と江戸—

日本独自の風土の中で生まれた縄文時代と江戸
時代の美。多彩な美術工芸品から両時代の美の
在り方を対比し浮き彫りにします。

9月19日(土)～11月1日(日)

企画展

秋田の石っころ

秋田の化石、岩石、石製品などを展示し、
秋田の地質の成り立ちや石を利用した人々の
生活を紹介します。

11月21日(土)～4月4日(日)

菅江真澄資料センター企画コーナー展

秋田の先覚記念室企画コーナー展

ふるさとまつり広場

●土人形
4月17日(金)～5月12日(火)

●鹿島船
5月22日(金)～6月23日(火)

●涼を求めて
7月3日(金)～8月21日(金)

●真澄酒物語—真澄と酒を巡る話—
7月18日(土)～9月6日(日)

●農民文学の作家 伊藤永之介
9月26日(土)～11月29日(日)

●ショウキサマ
10月2日(金)～11月17日(火)

●真澄研究者内田武志の新資料
10月17日(土)～12月6日(日)

●正月儀礼
12月4日(金)～1月13日(水)

●ひな人形・押し絵
2月19日(金)～4月6日(火)

●おらほの真澄—能代・山本—
3月20日(土)～5月16日(日)